

## コラボ教育での学び

### コラボレーション看護論を受講して～チーム医療を推進できる人材に～

神戸市看護大学大学院 博士前期課程 2年生 原田富士子

今年度より、COC事業関連科目として大学院でコラボレーション看護論が開講されました。私も、地域連携の業務に携わっているため、チーム医療における看護師の役割や看護管理を学ぶことには大変関心を持っていました。

授業はオムニバスで多くの講師の方が担当され、どの回も非常に充実した内容でした。現場で活躍されているCNS（専門看護師）の方々の先駆的なケアチーム活動の取り組みや、在宅療養支援の具体的な事例を通じた実践を聞かせていただき、とても感銘を受けました。また、講義を受けて、私の職場での退院支援や地域連携がうまくいかなかった場面を思い出し、情報や交流の機会を待っている受身的な部分も多かったのではないかと振り返ることが出来ました。

私が専攻する看護管理学分野においても、地域の限られた資源の中で、医療を担う多職種がお互いの強みを活かし合うための地域レベルでのマネジメントは重要な課題です。今回の講義の中で、地域の医療スタッフ間で絶妙なバトンパスを行うためには、「顔が見える」を越えて「何をしているかがわかる」レベルの信頼関係を作ることが必要だと言われていました。私達は、看護が地域の中で何ができるか、より一層アピールしていく必要があると感じました。

経営学者S. ロビンスは、「チームとは、協調し共に働くことにより、構成員個々の投入力の総和以上の業績・成果をあげる相乗効果（シナジー効果）を生むものである」と述べています。チームで協働することが、地域住民の方にとって、より大きな成果や価値をもたらしているかどうか、チーム内の多職種が存分に各々の力を発揮できているのかわかるとかを問いながら、ケアをつなぐ看護師として成長していきたいと思います。



大学院生室

## COC 研究ひろば 第5回

### ～医療・保健・福祉・介護における「多職種連携」の組織づくりを考える～後編

神戸市看護大学 地域・在宅看護学分野 講師 宇多みどり

前号では、在宅医療・介護の現場で「地域包括ケアシステム」が必要とされている理由とそれを構築するための「多職種連携」に関する組織づくりの研究について説明しました。今号はその続編として、「多職種交流会in須磨」（平成27年8月29日開催、以下「多職種交流会」）での活動と調査結果の一部を紹介します。

「多職種交流会」は、須磨区の医療・福祉・介護の専門職からなる自主グループによるもので、参加者は120名、医師や看護師など医療職が45.5%、ケアマネジャーや相談職などマネジメントを主とする職種が27.7%、ホームヘルパーなど福祉・介護職が26.7%でした。研究では、この会の協力を得てこれまでの調査で明らかになった須磨区の「多職種連携」における課題、①専門職としての個々の役割を知る、②地域の社会資源や他職種多機関の役割を知る、③連携の手段・作法を知る、④連携の行動化を図ることについて参加者に共通認識をして頂きました。そして、多職種で構成されたグループでの交流会（内容：各専門職の立場から「地域で認知症の方を支える」ための課題や役割についての検討）終了後にアンケート調査を実施しました。その結果、「他職種の役割は分かりましたか」や「情報共有すべき内容と他職種に伝える必要性が分かりましたか」の質問に半数以上が「わかった」と回答されました。また、「今回の経験は日々の実務で活用できますか」では、9割以上の方が「できる」や「まあできる」という回答でした。「報告・連絡・指示の手段、作法が分かりましたか」の質問では、「わかった」という回答が約17%と最も低い回答でした（回収率45.9%）。その他に、「問題を知ることはできたが解決に向けての話し合いが難しい」や「何ができるのかアイデンティティをしっかりと持つべき」という意見を頂きました。

これらの結果を受けて、「多職種連携」を強化するために必要な知識や技術等について提案ができるよう今後も検討していきたいと思います。



「多職種交流会 in 須磨」

グループ交流会の様子